

## 特別支援教育におけるロマンティック・サイエンス(8)

子どもと一緒に、一緒の世界を作り上げようとする中で考えてきたこと

企画者・司会者	野口和人	(東北大学大学院教育学研究科)
話題提供者	鈴木 徹	(秋田大学教育文化学部)
	佐々木健太郎	(宮城教育大学附属特別支援学校)
指定討論者	太田博巳	(石川県立いしかわ特別支援学校)
	吉川一義	(金沢大学人間社会研究域)
	平野幹雄	(東北文化学園大学医療福祉学部)
	前川久男	(筑波大学名誉教授)

KEY WORDS: 特別支援教育, ロマンティック・サイエンス, A. R. ルリヤ

### 【企画趣旨】

ロマンティック・サイエンスは、ロシアの高名な神経心理学者である A.R.ルリヤが希求したものである。晩年の「偉大な記憶術者の物語」や「失われた世界」が代表的な著作であり、伝統的な(分析的で再現可能性を求める)科学的方法と記述的な方法との融合を目指すものである(Cole, Levitin, & Luria, 2005)。近年、質的な研究の可能性について議論されているが、ロマンティック・サイエンスとは単に対象の言動の質的な側面に焦点を当てるに留まらない。ルリヤ自身は“具体的にのぼる”、つまり一人の具体的な個人に寄り添い、真実を見出そうとしていたものと考えられる。過去7回の自主シンポジウムを通して、我々はロマンティック・サイエンスをもとにした特別支援教育における新たな方向性を模索してきた。8回目となる今回は、「子どもと一緒に、一緒の世界を作り上げようとする中で考えてきたこと」について2つの話題提供に基づき、さらに議論を深めたいと考えている。

### 【話題提供1: 鈴木徹】

書字に対する苦手意識が顕著であった高校生のLD児について話題提供する。彼は、小学校の頃から「人並みに漢字が書けるようになりたい」と願い、複数の療育機関に通ってきた。その甲斐もあって書字の困難は軽減した。ただ、長年、苦手な漢字に取り組んできたため、書字に対する苦手意識は顕著なものになっていた。漢字学習を通して彼とかわることになった。

彼は真剣に学習に取り組んでいた。間違いを何度も何度も確認していた。その様子から、学習を継続することで実力がつくとは私は確信していた。一方、彼と関係性を築くことに苦慮していた。彼は、自分から話すことはなく、全て保護者が代弁していた。話しかけても素っ気ない返事しか返ってこなかった。彼の内面を知ろうと私は努めた。

ある時、学習中に彼が居眠りをした。目を覚ますと、「最近、テスト勉強で寝ていなくて。すみません」と笑った。私は注意せず、一緒に笑った。この出来事を契機に、彼と私の関係性が少しずつ変わっていった。気がつくと、談笑する時間が増え、進路などの悩みを相談してくるようになった。このような関係性の変化は、学習スタイルの転換に影響を及ぼすことになった。

最終的に、彼は苦手意識を払拭することができた。彼の努力なしには成し得なかったことであるが、関係性の構築を重視し、その変容によってアプローチ方法を変えてきたことも大きく影響していたと思われる。

### 【話題提供2: 佐々木健太郎】

知的障害特別支援学校高等部在籍生徒及び卒業生を対象とした校外余暇支援活動の取組について話題提供する。筆

者らは、宮城教育大学附属特別支援学校高等部の在校生及び卒業生を対象に、参加者同士の仲間関係の構築を目的とした校外余暇支援活動を主宰してきた。何かを学習する場としてではなく、参加者の興味・関心を引く活動を展開し、参加者の主体性を確保することを常に意識してきた。

活動開始当初は、在校生のみを対象として活動した。学校外での活動であったものの、学校生活を共にする筆者ら学校関係者との関係性を基盤に、生徒も安心して参加しているものと思われた。活動を継続する中で、卒業生も参加の対象として拡大することとなり、現在では、在校生から社会人まで年齢層が厚くなった。その過程で、参加者にいくつかの変化が生じてきた。

まず、卒業生は、後輩のために自らの給料で差し入れを持参したり、職場で大切なことや大変なことを自ら語り出したりするなど、後輩のために働き掛ける様子が見られるようになってきた。在校生は、上記の先輩の様子を見聞きし、自身の将来の姿を先輩の姿に重ね合わせ、卒業後の生活についてイメージして自ら語るようになってきた。

筆者は、在校生と卒業生双方の話に耳を傾け、時には互いの様子を伝えつつ、年5回の活動の場を共有してきた。約7年間、そのコンセプトを変えずに、学校とは別の緩やかなつながりの場を設定し続けることで、参加者同士が関係を構築しようとし、活動に様々な意味を付加するようになってきたと考えられた。

### 【話題提供3: 太田博巳・吉川一義】

肢体不自由特別支援学校から大学に進学したNは、打ち込める活動を見つけたことから「著しい下肢の障害」が改善され動くようになった。変化しないと思われていた脳性麻痺は脳性麻痺による活動停止・低下による廃用の関節拘縮や萎縮が本体だったのではないかとエビデンスのないことはしない医療・教育から取り残されたことに、未開の重要な実践と研究が残されているのではないかと。

### 【指定討論】

平野幹雄: ロマンティック・サイエンスは、単に事例の具体的な記述をデータとする点のみではなく、長期間のかかわりにおける対象者とのニーズの変化、かかわり手との関係性の構築やその変化、かかわり手の見方や解釈の変化をも同時に分析対象としうる点こそが特色となろう。各々の話題提供をそうした観点から整理することで、各々の実践にどのような学術的な議論が可能か提案したい。

前川久男: 上記の話題提供及び指定討論をふまえて、特別支援教育におけるロマンティック・サイエンスのあり方について総括的な議論を行う。

(NOGUCHI Kazuhito, SUZUKI Toru, SASAKI Kentaro, OHTA Hiromi, YOSHIKAWA Kazuyoshi, HIRANO Mikio, MAEKAWA Hisao)